（まだ結ばれない）運命の恋人

小林　富美子

【あらすじ】

四十歳の誕生日を迎えた売れない小説家・宝田誉は、コンビニの深夜バイト中に強盗にナイフで刺され、走馬灯で後悔だらけの人生を振り返ることになる。薄れゆく意識の中、なぜか「時よ戻れ！」と叫ぶ同僚の神崎。これってもしかしてタイムリープのチャンス！？死に際に大慌てで『人生で戻りたい時ＴＯＰ３』をリストアップする誉。

誉は第三位と第二位に二人の元カレとの思い出を選出して甘い記憶に浸るが、どちらも冷静に振り返るとろくでもなく、やり直したところで上手くいきそうにもない。結局、第一位まで辿り着く前に、誉は一命を取り留め病院のベッドで目を覚ます。傍らには、高校の同級生・大山大矢からの見舞いの品である一升瓶が置かれていた。

バイトに復帰した誉は、タイムリープ未遂に終わった第一位の思い出として大矢と過ごした高校時代について神崎に語る。親友・遥子との三角関係をきっかけに大矢への想いを封印した誉は、その事を未だに後悔していた。そして現在。彼女がいるにもかかわらず、深夜に花火を持って訪ねてくる大矢に、誉はもう家に来ないでと告げる。落ち込む誉をさり気なく気遣う神崎。そこへ海外から数年ぶりに帰国した遥子が現れて、誉に意外な告白をする。複雑な想いを抱えきれず酔いつぶれた誉を、神崎は思わず抱きしめてしまう。

一方大矢も、誉に負けないくらい誉への想いをこじらせて身動きが取れなくなっていた。神崎に抱きしめられる誉を目撃していた大矢は、同級生の結婚パーティーでヤケを起こし、それをきっかけに誉は再び命の危機に晒される羽目になる。不本意ながら二度目のタイムリープチャンスを手に入れた誉は、迷うことなくとっさにある光景を思い浮かべる。

人生をやり直すには、過去ではなく今ここで自分と向き合う必要があると気付いた誉。誉の時間は、未来に向かって進み始める。

【登場人物表】

宝田誉（17～40）作家
大山大矢（17～40）カメラマン
神崎琥太郎（26）誉のバイト先の同僚
森本遥子（18～41）誉の友人
平島信（18～41）誉の友人
宝田豊（35）誉の妹
小林太賀（27）誉の元彼
村上虎威（23）誉の元彼
虹子（28）モデル

アナウンサー
強盗
母親
少女
男子A
女子A
男子B
女子B
男A
女A
男B
女B

○誉の家・屋上（朝）
マンションの狭い屋上。
朝日に照らされた高層ビル群や東京タワーが遠くに見える。
そのいかにも東京らしい景色。

○走行中の電車・外観（朝）
ぎゅうぎゅうの満員電車。

○そこそこ都心の駅・改札・前（朝）
通勤や通学の人々で混み合っている。

○路上（朝）
人通りの多い駅前。
駅へ向かう、制服やスーツ姿の人々。
ラフな格好でひとり逆行するように、
のんびり歩く宝田誉（４０）。
朝日に顔をしかめ、大きくあくび。

○公園・前（朝）
ランニングする人や、登校中の小学生
達とすれ違う誉。
犬の散歩をしている、顔見知りらしき
婦人と笑顔で挨拶を交わす。

○誉の家・外観（朝）
四階建ての古いマンション。
郵便物を確認し、建物に入っていく誉。

○同・部屋・中（朝）
床も壁も、雑然と積み上げられた本に
埋もれ、散らかった狭いワンルーム。
シャワーを浴び、着替えた様子の誉が、
テレビで情報番組を流しながら、ソフ
アで本を読んでいる。
テレビに表示されている時刻は、
『7:59』。
アナウンサーの声「それでは占いです。今日
最も運勢が良いのは、うお座のあなたです」
顔を上げ、テレビを観る誉。

アナウンサー「思いがけないアクシデントでも大活躍！　今日こそ運命の人に出会えちゃうかも。直感を信じて行動して下さい。ラッキーフードはカップ麺！　今日も元気に、いってらっしゃい！」

テレビを消し、本に栞を挟んで立ち上がる誉。遮光カーテンを閉める。

デスクの上の山積みの本の一番上に、読みかけの本を置き、ベッドに入る。

薄暗い部屋の中、デスクの上に大量に積まれた本の下には、閉じられたノートパソコン。

うっすら埃をかぶっている。

○コンビニ・外観（夜）

都会らしく建物に囲まれた駐車場のないコンビニ。

○同・バックヤード・中（夜）

スマホの画面に、写真が写っている。

バルーンで『40』と飾りつけられた壁をバックに立っている、誉と大山大矢（40）の写真。二人で『4』と『0』のローソクが立てられたホールケーキを持っている。

カップ麺を啜りながら、スマホでその写真を見ている誉、コンビニの制服姿。

次々にLINEが届く。

『（まるこ）こないだの写真！』

『（ボブ）結婚40周年？』

誉が『ちがうわ！　誕生日だわ！！』と打っている間に、

『（千里子）熟年夫婦ｗｗｗ』

『（森）生年月日一緒はさすがに運命』

『（ひらっち）このまえ息子に、大矢と誉って結婚してるの？　って聞かれたからまだって言っといた！』

『（千里子）@大山大矢　@宝田誉　交際ゼロ日婚頼む』

と立て続けに送られてくる。

打ちかけていた文字を一気に消し、キャラクターがよぼよぼになってゲロを吐いているスタンプを送る誉。
同時に大矢から同じスタンプが届く。
『（ひらっち）息ぴったり！』
カップ麺のスープを飲み干し、カップと割り箸をゴミ箱に投げ捨てる誉。
スマホをポケットにしまいかけて取り出し、もう一度写真を見る。
誉Ｎ「これは、運命じゃなくて、呪いだ」
少し迷って、写真を保存する誉。
ドアを開け、売り場へ出ていく。

○タイトル『（まだ結ばれない）運命の恋人』

○同・売り場・中（夜）
雑誌の検品をしている誉。
モデルの虹子（２８）が表紙の、男性向けのカルチャー誌を手に取る。
表紙には『特集　写真家・大山大矢』の大きな見出し。
パラパラとページを捲る誉。
虹子のグラビアが続いた後、虹子に向かってカメラを構える大矢の写真とインタビュー記事が現れる。
誉Ｎ「男女の友情なんて存在しない。そんなことに気付くのに、二十三年もかかってしまった。私たちはもう、友達にも恋人にもなれない」
ふと顔をあげる誉。
窓ガラスに映る、コンビニの制服姿の自分と目が合う。
雑誌を棚に戻し、検品を続ける誉。
少年誌を手に取る。
表紙には、新連載の漫画のタイトルの横に『人生逆転大優勝☆タイムリープ・コメディ』のコピー。
誉Ｎ「もしも、タイムリープして人生やり直せるとして」
立ち読みを始める誉。

誉N「一体どこからやり直せばいいんだろう」
神崎琥太郎（２６）がモップ片手に少年誌を覗き込む。
神崎「せんせー、またサボってる」
少年誌を棚に戻し、検品を再開する誉。
誉「その呼び方やめてってば。ただの一発屋」
神崎「一発で充分っしょ。俺もバンドで一発当てて、夢の印税生活送りてえー」
モップをギターのように抱えて弾く仕草をする神崎。
誉「一発本出した程度じゃ生活できないからここにいるんでしょうが。こちとら廃業寸前だっつーの」
神崎「廃業って、本書くのやめちゃうんすか？　次回作楽しみにしてるんすけど」
誉「読んだことないくせに」
神崎「活字無理なんで。てかせんせーの歳で廃業しちゃったら、この先どうするんすか？　結婚の予定とかあるんすか？」
誉「あるように見えますかー？」
返品予定の本を乱暴にカゴに放り込んでいく誉。
神崎「どうっすか？　俺とか」
誉「セクハラで訴えるよ」
入店チャイムが鳴り、眠っている少女を抱きかかえた母親が入店してくる。
神崎「らっしゃーせー」
母親「あの、お手洗い借りてもいいですか？」
誉「どうぞ、こちらです」
誉が笑顔でトイレの方向を指し示し、母親が会釈してトイレに入っていく。
それぞれ作業を続ける誉と神崎。
神崎「おれ、結構真剣っすけど」
誉「……なにどし？」
神崎「え？」
誉「干支」
神崎「寅っす」
誉「じゃあ無理」
神崎「なんで！？」
誉「寅年は鬼門」

神崎「ふるならもっとちゃんとふってくださいよー」
誉「寅年生まれはマジで無理。あと、バンドマンも無理」
神崎「そんなあ」
再び入店チャイムが鳴る。
神崎「らっしゃーせー」
入口の方へ振り向く神崎。
目出し帽を被った男と目が合う。
男の手にはナイフ。
気付かずに作業を続けている誉。
神崎「え」
男が神崎にナイフを向ける。
強盗「……金を出せ」
じりじりと後退りする神崎。
誉「神崎君？」
誉が振り向き、驚いて目を見開く。
強盗「さっさとしろ！　金を出せ！」
神崎が両手を上げレジに向かい、ナイフを握りしめた強盗が後に続く。
レジに入り、レジ下の赤い防犯ブザーをチラッと盗み見る神崎。
手を伸ばそうとした瞬間、トイレのドアが開く音がして、強盗が振り返る。
トイレから少女が出てくる。
誉「……！」
不穏な空気に困惑する少女。
強盗が走り寄り、人質に取るようにして少女の首元にナイフを突きつける。
強盗「通報したら殺す！」
立ちすくんで動けない誉。
強盗「ぶっ殺すぞ！」
少女が泣き出す。
少女「ママ……」
トイレから母親が出てくる。
母親「……ゆうちゃん？　ゆうちゃん！！」
少女に駆け寄ろうとする母親。
強盗「来るな！」
強盗が母親へナイフを向ける。
咄嗟に割って入る誉。

誉「ちょっと待って！　お金、今出すから！」
誉、神崎に向かって、
誉「神崎君！　早く！！」
レジを開け急いで金をかき集める神崎。
小銭がジャラジャラと床に落ち、強盗が振り返る。
その隙に腕をすり抜け、母親に駆け寄ろうとする少女。
母親が誉を押し退け、泣きながら少女に手を伸ばす。
母親「ゆう！」
強盗「てめえ！」
強盗が少女にナイフを振りかざす。
少女を突き飛ばす誉。
血に染まったナイフが床に落ちる。
母親「きゃあああ！」
強盗「くそ、くそ……」
強盗が店から走り去る。
誉N「もしも人生をやり直せるなら、」
血を流して床に倒れ込む誉。
神崎「（大声で）先生っ！！」
誉N「少なくとも、深夜のコンビニでバイト
しなくていい人生でありますように」
苦しそうに顔を歪める誉。
怯えた少女と目が合い、無理矢理微笑んでみせる。
誉「大丈夫、大丈夫だよ……」
ゆっくりと目を閉じる誉。
人生の節目ごとのアルバムのように、
走馬灯らしきものがスライド式に流れていく。おもちゃを持って覗き込む父親と母親の顔、保育園のお遊戯会、小学校の給食当番、読書感想文で表彰されたこと、プール帰りに友達と食べるアイス、中学校の修学旅行、通学路、友達の家でダラダラ読む漫画。
誉M「はは、もっと勉強しとくんだったな」
高校の文化祭、浴衣で出かけた夏祭り、わたあめ、ベビーカステラ、花火。
誉M「戻りたい……」

卒業式。卒業証書を手に同級生達と笑いあう大矢の横顔。
遠くからかすかに声が聞こえ、うっすらと目を開ける誉。
神崎が誉に向かって何かを繰り返し叫んでいるのがスローモーションのように見える。
神崎「『と・ま・れ』（っぽい口の動き。聞こえない）」
誉M「何？　神崎君、聞こえないよ。『と・ま・れ』？　違うか。『も・ど・れ』？　も意味わかんないよね。止まれ、戻れ……」
× × ×
（フラッシュ）
少年誌の表紙。
『人生逆転大優勝☆タイムリープ・コメディ』のコピー。
× × ×
誉M「『も・ど・れ』。時よ、戻れ……え、もしかしてこれ……タイムリープのチャンス！？」
叫び続ける神崎。
壁の時計、針が逆戻りしていく。
誉M「待って、ねえ、どこに戻ればいいの」
眠るようにゆっくりと目を閉じる誉。
誉M「やばい無理、召される」
走馬灯、時系列がシャッフルされ、大量の風景や人物のイメージが次々に現れては消える。
誉M「待って神様、せめて三つ、三つでいいから絞らせて。あー思い出せ！　出でよ！　私の人生で戻りたい時、TOP3〜！！」
○（以下回想）キャンプ場・中（十年前・夜）
T『2014年（10年前）』
静かで開けた場所に椅子を並べて座り、満点の星空を見上げている誉（30）と小林太賀（27）。
太賀「流れ星ってさあ、星が消える前に願い事言わなきゃいけないんでしょ？」

誉「うん。かなり早口で言わなきゃダメだね」
太賀「じゃあ願い事一個に絞って、準備しとかないと」
誉「そんなに願い事あるの？　強欲～」
流れ星が流れる。
太賀「（早口で）誉と結婚できますように！」
誉「……え？」
驚いて太賀の方を向く誉。
誉N「これだ。人生で戻りたい時TOP3、第三位。もしもあの時、結婚してたら」
タイトル『寅年生まれのたいがくん』
太賀が誉の目を見つめて微笑む。
太賀「結婚して、誉」
誉「……うん」
椅子に座ったまま手を繋ぎ、キスをする誉と太賀。

○居酒屋・店内（十年前・夜）
大山大矢（30）と森本遥子（31）が並んで座り、向かいに誉と平島（31）が座ってビールジョッキを掲げる。
平島「ご婚約、おめでとうございまーす！」
乾杯する四人。
店内のあちこちから酔っ払った客の「おめでとう！」の野次や拍手が聞こえて、照れくさそうに頭を下げる誉。
遥子「で！？　プロポーズの言葉は！？」
誉「いいよ、恥ずかしいから」
大矢がつまらなさそうに枝豆をくわえ、皮を皿に投げ捨てる。
平島「えー、知りたい知りたい～」
遥子「ちなみに、ひらっちのプロポーズ、どんなんだったっけ」
平島「鍋に指輪隠して、『これから毎日この鍋で俺に味噌汁を作ってほしい』って渡したら、鍋の蓋開ける前に『なんでプロポーズなのに鍋なの』って泣いてキレられた」
爆笑する誉と遥子。
遥子「で、誉は」
誉「……キャンプ行った時、流れ星流れて、

お願い事、『誉と結婚できますように』って……」

同時に手で口元を抑える遥子と平島。

誉「それで、結婚してって」

平島「フゥゥゥゥ！！」

誉がメニューで顔を隠す。

遥子「太賀、意外とやるじゃん」

平島「そりゃーいくら草食系みたいな顔してたって、寅年生まれのタイガー君だもん」

平島が大矢に向かって、両手で前足のようなポーズを作る。

平島「ガオ」

無視してホッケをいじっている大矢。

平島が大矢の頭をはたく。

平島「おいお前、寝てんじゃないよ！」

大矢「ってぇな、寝てねーよ。こいつと結婚するなんてこの先大変だなーって、太賀に同情してたんだよ」

遥子が慰めるように大矢の肩を叩く。

遥子「負け惜しみはやめようよ。もうね、誉はあっち側の人間なんだよ」

境界線を作るように、テーブルの真ん中にメニューを立てる平島。

大矢に向かってニヤ〜ッと笑う誉。

誉「すんません！　お先に失礼しまーっす」

大矢「うわ！　過去イチのドヤ顔！」

「あはは」と楽しそうに笑う誉。

○商店街・路上（十年前）

雨が降る中、傘をさして歩いている誉。

不動産屋の前で足を止め、貼り出された賃貸情報を眺める。

『新婚さんにオススメ！』の文字に目を止め、スマホで間取りの写真を撮る。

傘をくるくると回し、弾んだ足取りで歩き出す誉の後ろ姿。

○太賀の家・部屋・中（十年前）

殺風景なワンルーム。

家具はほとんどないが、アンプやエフ

ェクター等の機材とキーボードが置かれている。
ベッドの上でギターを弾いている太賀と、ベッドに寄りかかりスマホで撮影した物件情報の写真を見ている誉。
誉「ね、この部屋、内見行ってみない？」
太賀「見して」
ベッドから手を伸ばして誉の手を引き寄せ、スマホを覗き込む太賀。
太賀「いいね。キッチン広そう」
誉「でしょ。リビングもさ、ここで仕切れるから家でもお互い作業できるし」
太賀「……でも、さすがに高くない？」
誉「まーちょっと予算オーバーだけどさ。私の方が家にいる時間長いから、なんなら私大目に出すし」
太賀「……そっか。じゃあ、内見行く？」
誉「やった！　まーでもとりあえず、親に挨拶行った後かなあ」
太賀「なんか緊張するなー」
誉「えー、大丈夫だよ。もう何回も会ってるじゃん」
ベッドから降りてギターを置く太賀。
太賀「あのさ」
誉「ん？」
太賀「……同棲はすぐしたいけど、籍入れるのは三年後でもいい？」
誉「えっ？」
太賀「俺さ、三十歳まではバンド頑張りたいんだよね」
誉「……」
太賀「三十歳になっても芽が出なかったら、けじめつけてちゃんと就職する。だからそれまで信じて待っててほしい」
誉「結婚して、バンドも続ければいいじゃん」
太賀「それだとダラダラ甘えちゃいそうだし」
誉「……でも私……三年経ったら三十三だよ」
誉を抱き寄せる太賀。
太賀「誉は何歳になっても可愛いから大丈夫」
誉「そうじゃなくて！」

太賀の腕を振り払い、立ち上がる誉。
太賀が驚いたように誉を見る。
誉「そういうことじゃなくて。三年も経ったら、私たち、……どうなるかなんてわかんないじゃん」
太賀「そんなこと、」
誉「三年後も好きでいる保証なんてないじゃん。私も。太賀も」
太賀「……」
誉「三年も私、……待つ自信ない。ごめん」
バッグを掴んで部屋を出ていく誉。

○アパート・外観（十年前）
土砂降りの大雨。
傘も持たず誉が飛び出してくる。
振り向いて太賀の部屋を見上げるが、カーテンで中は見えない。
誉N「待つ自信がないんじゃなくて、三年後も愛されている自信がないだけだった」
ずぶ濡れで走り去る誉。

○誉の家・ベランダ・中（十年前・夜）
電話している誉。
誉「あー、お母さん。うん。それなんだけど、お正月やっぱ帰れなくなっちゃった。ごめん、落ち着いたらまた。え？　元気だよ。わかった、太賀に伝えとくね……」
電話を切り、ため息をつく誉。
太賀とのLINEを開く。
『やっぱり、ちゃんと話し合いたい』
という誉のメッセージの後、発信が二回。既読になっているが返信はない。

○太賀の家・玄関・前（十年前）
インターホンを押す誉。
太賀の声「はい」
誉「私。……ちょっと話せる？」
太賀の声「……ごめん、会えない」
誉「なんで」
太賀の声「誉とは結婚できない」

誉「……私、やっぱ待つから。何年でも。大丈夫だから」
太賀の声「俺が大丈夫じゃないから」
太賀がドアを開ける。
目を合わせずに腕を差し出して、袖を捲ってみせる太賀。
息を呑む誉。
誉「どうしたの、腕……」
太賀「蕁麻疹。ストレス性かもしれないって、医者が」
誉「……え」
太賀「体が、無理って言ってるから。……ごめん、もう来ないで」
太賀がドアを閉める。
ドアの前に立ち尽くす誉の後ろ姿。

○居酒屋・店内（十年前・夜）
誉、大矢、遥子、平島が飲んでいる。
テーブルの上には飲みかけのグラスや食べ終えた皿などが置かれている。
平島「……いやいや、ナイーブすぎでしょ」
誉「だよねー！　そんな人、面倒見きれないもん。良かった、結婚しなくて！」
沈黙する大矢、遥子、平島。
ビールを飲み干す誉。
誉「いやーほんと、たった三年頑張れないくらいなら結婚しなくて良かったんだよ！　結婚したら三年どころか、この先一生一緒にいなくちゃいけないんだからさー」
遥子「（ポツリと）……一生一緒にいてくれや」
平島「お、三木道三？　カラオケ行っちゃう？」
大矢「いいね。いこーぜ」
立ち上がる平島。
平島「じゃ俺、嫁に電話してくるわ！」
遥子「ちょっとあんた達、誉の話まだ終わってないじゃん」
誉「大丈夫大丈夫。いこ！」
笑って伝票を掴む誉。

○カラオケボックス個室・中（十年前・夜）
スクリーンを眺めている誉と、デンモクを操作している大矢。
誉「結局二人かーい」
大矢「ひらっちは嫁に勝てないって、俺にはわかってたね」
誉「ヨーコも四時起きって言ってたもんねえ」
大矢「あーあ、お前と二人なら来るんじゃなかった」
誉「帰れ帰れ！　今すぐ帰れ！！」
大矢「残念、もう曲入れちゃいました～」
誉「なになに、三木道三？」
光GENJIの『勇気100％』のイントロが流れる。
誉「えーやば、懐かしーっ」
マイクを持って立ち上がる大矢。
大矢「♪がっかりしてめそめそしてどうしたんだい」
笑顔で一緒に歌詞を口ずさむ誉。
大矢「♪太陽みたいに笑うきみはどこだい」
誉、歌詞を目で追ううちに涙目になる。
大矢「♪やりたい事やったもん勝ち青春なら辛い時はいつだってそばにいるから」
立ち上がり、手を叩いてはしゃぐように合いの手を入れる誉。
大矢、振り返らずスクリーンを睨むように見つめて歌い続ける。
誉N「一年後、太賀が地元に戻って就職し、幼馴染と結婚したと風の噂で聞いた」
立ち上がって大矢のマイクを奪う誉。
誉「バンドマンの、おおばかやろー！！！」
『勇気100％』を熱唱する誉と大矢。
誉N「もしもあの時、私が三年待ってたら、この夜もきっと、なかったことになる」

○同・外（十年前・夜）
ガラス越しに誉が涙を拭うのが見える。

○羽田空港・全景（十五年前）
離着陸する飛行機。

Ｔ『２００９年（１５年前）』

○同・保安検査場・前（十五年前）
保安検査場に並ぶ人々で賑わう中、コートを着た誉（２５）とギターケースを背負った村上虎威（２３）が抱き合っている。
虎威「誉ちゃん、やっぱ行かないで」
誉Ｎ「人生で戻りたい時ＴＯＰ３、第二位はコチラ。もしもあの時、転勤を断ってたら」
誉が身を離しながら笑う。
誉「一年なんてすぐだよ」
虎威が鞄から赤いマフラーを取り出し、誉の首に巻く。
虎威「北海道で、風邪ひかないように」
誉「これ……虎ちゃんが編んでくれたの？」
虎威「うん。メリークリスマス」
マフラーに顔を埋める誉。
誉「……あったかい」
虎威「毎日電話するね」
誉「うん」
もう一度抱き合う誉と虎威。
タイトル『寅年生まれのとらいくん』

○同・到着ロビー・前（十四年前）
Ｔ『１年後』
スーツケースをひいた誉がキョロキョロと辺りを見回しながら出てくる。
誉「いないか……」
迎えに来た家族に駆け寄る人、抱き合う恋人たちなどを横目に、赤いマフラーを巻いて歩き出す誉。

○商店街・路上（十四年前・夜）
クリスマスソングが流れ、サンタの服を着たケーキの売り子や、買い物客などで賑わっている。
路上から、マンションを見上げる誉。
他の部屋は窓から明かりが漏れているが、誉の見つめる部屋だけ電気が消え

ている。

○誉と虎威の家・玄関・中（十四年前・夜）

「ただいまー」とドアを開ける誉。

照明のスイッチを押すが、暗いまま。

誉「えっ？　嘘でしょ」

誉、ヤケクソでスイッチを何度もパチパチ切り替える。

足元の小さな段ボール箱が「ガサガサッ」と音を立て、飛び退く誉。

誉「えっ！？？」

誉、しばらく固まって段ボール箱を見つめるが、箱の上に手紙が置いてあるのに気づいて手に取り、ガラケーを開いて画面の明かりで読み始める。

虎威の声「誉ちゃん、おかえりなさい。せっかく帰ってくるのに、お迎えできなくてごめんね。今日は新曲を作るために、レイコちゃんちで作業してきます。明日か明後日には帰れると思う」

眉をひそめる誉。

誉「……んん？」

虎威の声「電気代も払えてなくてごめんね。家賃とあわせて、いつか絶対返すから。それから、箱の中にいるのは新しい家族のブラウニー君です」

段ボール箱を見る誉。

段ボール箱、ガサガサいっている。

虎威の声「箱の横にある袋からスプーン一杯とって、一日二回食べさせてあげてください。メリークリスマス！」

段ボールの蓋を恐る恐る開ける誉。

茶色いモルモットが誉を見上げる。

○同・寝室・中（十四年前・夜）

壁も床も本とCD、楽器や機材だらけで散らかった部屋。

体育座りで膝に顔を埋め、ガラケーで電話している誉。

誉「……それで、家に帰ったら虎ちゃんいな

くて、ブラウニー君がいた。餌あげようとしたら、噛まれた」

誉の人差し指に絆創膏が巻いてある。

○平島の家・ベランダ・中（十四年前・夜）

煙草片手に電話している遥子（２６）。

遥子「何それ。てかなんでわざわざクリスマスイブに女の家行ってるわけ？」

遥子の背後、ガラス越しに平島の部屋の中が見える。

狭い部屋に小さいツリーが置かれ、テーブルにはピザやフライドチキン、ケーキや酒などが所狭しと置かれている。

サンタの帽子をかぶった大矢（２５）と、トナカイのカチューシャをした平島（２６）が、コップに注いだワインを片手に人生ゲームで盛り上がっている。

誉の声「女っていうか……レイコちゃんは私も友達だし、本当に曲作ってるんだと思う」

イライラしたような顔で灰皿に煙草を押し付ける遥子。

遥子「一年ぶりに彼女が北海道から帰ってくる日に？　おかしいでしょうが」

ガラス越しに大矢と平島が大騒ぎする声が聞こえ、ガラス戸を開ける遥子。

遥子「（中に向かって叫ぶ）うるさーい！！」

遥子、ガラス戸をぴしゃりと閉じる。

部屋の中、「やべっ」と固まりながらもアイコンタクトでおどける平島。

それに笑いつつ、電話の内容が気がかりな様子で、チラッと遥子を見る大矢。

遥子「とにかく、今からこっち来なよ。てか迎えに行こうか？」

誉の声「大丈夫大丈夫。虎ちゃん、もしかしたら帰ってくるかもだしさ」

遥子「……なんかあったら、電話するんだよ」

×　×

誉「うん、ありがと」

電話を切って本棚の一角を見つめる誉。

思い詰めたような顔で、本棚にズラッと並んだ小さなスケッチブックの一番端の一冊に手を伸ばす。

○商店街・路上（十四年前・夜）
スーツにコート、赤いマフラー姿の誉がマンションの自分の部屋の窓を見上げる。
明かりがついている。

○誉と虎威の家・玄関・外（十四年前・夜）
深呼吸して笑顔を作り、誉がドアを開ける。
誉「ただいまー！　なんかいい匂いするー」
キッチンに立っている虎威が、おたまを片手に振り返る。
虎威「おかえり誉ちゃん。今夜はお鍋さんよー」
誉、靴を脱ごうとして見覚えのない女物の靴に気づく。
虎威「（鍋の様子を見ながら）今日はねえ、レイコちゃんが遊びにきてくれてるよ」
誉「……え？」
レイコの声「誉ちゃんおかえり、お邪魔してまーす」
後ずさる誉。
誉「あ、私、ちょっとコンビニ行ってくる」
虎威「おー。気をつけてね」
パタンとドアが閉まる。

○商店街・路上（十四年前・夜）
買い物中や帰宅中の人々で賑わう中、ぼーっと歩く誉。
着信音が鳴って、電話に出る。
誉「……もしもし」
大矢の声「お前どこいんの？　俺いま高円寺いるんだけど」
誉「そうなんだ。私は高円寺にいないけど」
大矢の声「いねーのかよ。じゃあ何時に帰ってくんの？」

誉「わかんない」
大矢の声「……お前、なんかあった？」
誉「別に。何にもない」
大矢「嘘つき」
誉が顔を上げると、正面にガラケーを耳に当てた大矢が立っている。

○公園・中（十四年前・夜）
ブランコに座って、寒そうに縮こまり缶ビールを飲んでいる誉と大矢。
大矢「さみー」
誉「高校ん時さあ、真冬に公園で写真撮ったよね」
大矢「ああ。カメラ買った日な」
誉「ほんとにカメラマンになっちゃうなんて、すごいよ。大矢は」
大矢「一生懸命やってるやつは、みんなすげーだろ。カメラマンだろうが、会社員だろうが」
誉「全然一生懸命できてないよ、会社員」
大矢「あっそ。じゃあだっせえな、お前は」
誉「だっさいよね」
誉がビールをぐいっと飲む。
誉「一生懸命頑張ろうとして北海道まで行ってみたんだけどさ、行かなきゃよかったなーなんて、あはは」
大矢「……」
誉「ヨーコに聞いたでしょ？　浮気されてさ、だっさいよー私」
大矢「別に、浮気って決まったわけじゃねーんだろ」
誉「……日記、読んじゃったんだよね。虎ちゃんの」
大矢「今時日記とか書いてるやついんのかよ」
誉「いんの。虎ちゃんはそういう人なの」
大矢「あっそ」
誉「私がいない間さ、その子何回もうちに来てたみたい。今日も帰ったらいたの。普通に。友達みたいに。おかえりーって」
大矢「……地獄じゃん」

誉「はは、人の日記読むとかサイテーだよね。超サイテー。でもさ、あれ多分浮気じゃなくて、本気だわ。だって」

ビールを飲み干す誉。

誉「……好きって書いちゃってるんだもん、正直すぎるでしょ」

大矢「そんなの、直接聞かなきゃわかんねーじゃん」

誉「いやー、聞かなくてもわかるよ。……それに、日記勝手に読んだなんて言えないし、サイテーすぎて」

大矢「……サイテーなのはお前じゃないだろ。虎威とその女だろ」

じっと足元を見つめている誉。

大矢「お前は一年間北海道行って一生懸命頑張ってただろ。多分。よく知らねーけど。見てねーし」

誉の目から涙が溢れる。

誉「……頑張ってたよ。死ぬほど」

大矢「それなのにお前がいない間に女連れ込んで、お前が帰って来る日もそいつんちに行ってて、ご丁寧に日記まで書いて、挙げ句の果てに拾ってきたモルモットに餌やれって、馬鹿か？」

空き缶を握りしめる誉。

大矢「何も知らないふりして今日もヘラヘラ家帰れんのか？　お前、悔しくねーのかよ」

誉「悔しいよ……悔しいに決まってるじゃん！」

大矢「だったらちゃんと話せよ」

誉「……」

大矢「ていうか殴っていいだろ、そんな奴。ボコボコにしてやれ」

誉「できないよ」

大矢「できる。お前は昔から腕力強いから」

誉「うっさい」

誉が大矢の肩を殴る。

肩を押さえてよろける大矢。

大矢「いってぇ～」

誉「大袈裟」

大矢「殴って、お前はこの変な話ネタにして小説書け。クリスマスイブに帰ったら、彼氏がモルモットになってましたって」
誉「はは。本当にあった怖い話」
大矢「言っとくけど、ぜってー売れるから。そしたら俺に印税半分よこせよ」
誉「なんでよ。てかビール代もらってないんだけど」
催促するように右手を差し出す誉。
大矢「おい、売れないカメラマンにたかるなよ！　出世払いで頼む、な、そんじゃ！」
走って逃げ出す大矢。
誉が追いかけて、大矢の背中に空き缶を投げつける。
大矢が避けようとして砂場に突っ込み、空き缶を拾いながら大笑いする誉。
誉N「このあと私は家に帰って虎ちゃんと話した。虎ちゃんは泣きながらごめんね、ごめんねと何度も謝った。泣きたいのはこっちだったけど、悔しいから泣く代わりに一発殴った。引っ越すお金がないからあと一年一緒に住んで欲しいと言われて、もう一髪殴った」

○高円寺駅・改札前（十二年前）
T『2年後』
エスカレーターを降りてくる遥子（28）を見つけて、手を振る誉（27）。
遥子が改札を出て誉に駆け寄り、花束を渡す。
遥子「受賞おめでとう、誉！」
誉「えー、嬉しい！　ありがとヨーコ！」
抱き合い、歩き出す誉と遥子。
遥子「それで？　どーなの、最近」
誉「どうって、会社辞めてからは毎日小説書いてるよ」
遥子「そーじゃなくて！　気になる人いるって言ってたじゃん」
誉「ああ。でもさ、寅年生まれだったんだよね」

遥子「それが何」
誉「虎ちゃん、寅年生まれのトライくんだったでしょ」
遥子「うん」
誉「その人、寅年生まれの、太賀くんなんだよね。タイガー」
遥子「こわっ。まさか、バンドマンじゃないよね」
向かいからギターケースを背負った太賀（22）が歩いてくる。
誉「あ、太賀くん」
太賀「あれ、誉さん」
遥子「バンドマンだ」
太賀「えっ？　はい、バンドやってますけど」
困ったように誉に笑いかける太賀。
誉N「私の人生、どこに戻ってもうまくいかない気がする」
※回想終わり

○病院・個室・中
ベッドに寝ている誉が目を覚ます。
宝田豊（35）が誉に駆け寄る。
豊「お姉ちゃん！！　あ、あたし、お母さん呼んでくる！」
誉「待って」
病室を出ようとしていた豊が振り返る。
誉「今、二千何年」
豊「……二千二十四年。ここ病院」
誉「タイムリープできなかった……（顔をしかめ）いたた」
豊「ちょっと、喋るのやめなよ」
誉「大丈夫大丈夫」
豊「じゃちょっとお母さん呼んでくるから」
誉「待って」
花瓶にいけられたあじさいの横に置かれた一升瓶を指差す誉。
誉「なに、この酒」
豊「ああ、ついさっきまで大矢君来てくれてたんだよ。それ、お見舞いにって」
誉「普通、お見舞いに酒持ってくる？」

豊「なんか書いてあるよ、ホラ」
酒瓶をクルッと回して誉に見せる豊。
飲み屋のキープボトルのように白いペンで『さっさと治せ』と書いてある。
ニヤニヤする豊。
豊「早く退院して一緒に飲もうだって～」
誉「そんなこと一言も書いてないでしょ」
後ろを向き、突然吹き出す豊。
誉「え、何」
豊「いや、別に」
スマホのバイブレーションが鳴る。
誉「ケータイとって」
豊「はい」
豊がスマホを手渡し、誉がＬＩＮＥのトーク画面を開く。
『（大山大矢）命に別状はないそうです』
続けて、病院のベッドで一升瓶を抱き気持ちよさそうに眠る誉の写真が送られてくる。
『（千里子）不謹慎ｗｗｗ』
『（ボブ）いつもの誉じゃん』
『（森）なんなら幸せそう』
『（ひらっち）もっとくれ』
『（大山大矢）家族の許可は得た』
豊が忍び足で病室を出ようとする。
誉「ちょっとあんた！！」

◯コンビニ・店内（夜）
品出ししている誉と神崎。
神崎「てか、刺された現場でバイト復帰するって強すぎませんん？」
誉「新しいバイト探すのめんどくさいんだもん。犯人捕まったし、もう大丈夫っしょ」
神崎「はあ。で、もしかして第一位も寅年とかならウケるんですけど」
誉「第一位は残念ながら寅年じゃないんだよねえ」
神崎「なーんだ。てか俺も、本当にあった怖い話していいっすか」

誉「何？」
神崎「俺、寅年生まれのバンドマンじゃない
　ですか」
誉「うん」
神崎「俺の下の名前、知ってます？」
誉「ごめん、わかんない。あとなんとなく聞
　きたくない」
神崎「寅年生まれの、琥太郎っす。琥は琥珀
　の琥で、右が虎」
誉「呪われてる！」
神崎「ていうか、ずっと一緒に働いてるのに
　下の名前知らないとか、せんせー俺に興味
　なさすぎでしょ」
誉「すいません」
神崎「で、第一位は？　なにどしっすか？」
誉「ねずみ。私と一緒」
神崎「タメっすか？」
誉「タメっていうか、誕生日も一緒」
神崎「え？」
誉「生年月日一緒なの、そいつ」
神崎「運命じゃん」
誉「そう思ってたんだけどね。二十三年前は」
神崎「二十三年、ほぼ四半世紀っすね。あれ、
　俺生まれて……？」
　両手で年数を数えるフリをする神崎。
誉「しばくよ」

○（以下回想）路上（二十三年前・朝）
　T『2001年（23年前）』
　田んぼの稲が青々と風になびいている。
　全速力で走る制服姿の誉（17）。
誉「やばい、間に合わない」
　チリンチリンとベルが鳴り、自転車に
　乗った大矢（17）が誉の横に並ぶ。
大矢「お前、遅刻確定じゃん」
誉「待って、ねえ、後ろ乗せて」
大矢「無理でーす」
　大矢が誉を追い越し、振り向いてメガ
　ホンのように口元に片手を添える。
大矢「はい、頑張って～！」

大矢、二十メートルくらい先に進んで止まり、ポケットから『写ルンです』を取り出す。
必死の形相の誉の写真を撮る大矢。
誉が猛ダッシュし、大矢に追いついて無理やり自転車の荷台に飛び乗る。
大矢「重っ！　自転車壊れる！」
誉「はい、頑張って〜！！」
大矢の背中をバシーンと叩く誉。
よろよろと自転車を漕ぎ出す大矢。
田んぼ道の真ん中を二人乗りの自転車が進んでいく。

○高校・廊下（二十三年前・朝）
大矢と平島（１８）、その後ろを誉と遥子（１８）が喋りながら歩いている。
前を向いたまま、『写ルンです』を持った手をさりげなく後ろの誉に向け、シャッターを押す大矢。
誉「ちょっと！　また撮ったでしょ」
大矢が振り返り、誉が睨みつける。
大矢「すまん、指が勝手に」
誉「次から有料だからね」
大矢「は？」
誉「お金取るから。モデル料」
大矢「うっせーブス！　じゃあ俺、撮影料取るからな」
誉「そもそも写真撮るなっつってんの」
平島が笑いながら遥子の隣へ移動し、誉と位置を入れ替わる。
平島「うっせーブスだって。小学生じゃん」
遥子「朝から元気だねえ」
誉「撮るならちゃんと撮ってよ、ホラ」
ダブルピースしてみせる誉。
大矢「お前の普通の写真なんか撮ったらフィルムがもったいねーだろうが！」
誉「変な顔の写真撮ってる方が、よっぽどもったいないでしょうが！」
誉と大矢の後ろを、少し遅れて歩く平島と遥子。

遥子「大矢ってほんと誉のこと好きだよね」
平島「あいつこないだ、『誉の変顔撮るのは俺のライフワークだ！』とか言ってた」
遥子「はは。一生一緒にいてくれや」
誉「あっ！　また撮った！　肖像権侵害！」
逃げる大矢と追いかける誉。
平島「さっさと付き合っちゃえばいいのにね」
大矢と誉を見つめている遥子。
平島「ヨーコちゃん？　聞いてる？」
遥子を見る平島。

◯同・教室・中（二十三年前・夕）
大矢が平島の机の上に写真の束を置く。
大矢「お祭りん時の写真、現像した」
平島「おー、見せて見せて」
誉と遥子、周りのクラスメイトも集まってきて人だかりができ、写真を回し見する。
浴衣姿でかき氷を持つ女子達、焼きそばを頬張る平島、クラスメイトの集合写真などが順に手渡されていく。
平島「やっぱ大矢、写真のセンスあるよなー」
遥子「ほんと、よく撮れてる」
平島「誉コレクション、新作ある？」
大矢「もちろん」
大矢が一枚の写真を机の上に置き、全員一斉に覗き込む。
りんご飴を持って涼しげに微笑む遥子と、右手にベビーカステラの袋を抱え、左手で綿飴を持つ誉のツーショット。
誉、綿飴に髪の毛がべったりついて、びっくりした顔をしており、さらにベビーカステラの袋が傾いて、カステラが袋から二、三個飛び出している。
どっと笑う一同。
遥子、涙を拭いながら、
遥子「超元気出る。どうやったらこんな瞬間撮れんの」
平島「ヨーコちゃんとの対比がまた、天才的な構図だな」

クラスメイト達が「焼き増しください」
「俺も」「私も」と次々に手を挙げる。
大矢「よかったなお前、人気者で」
誉「もっとまともな写真ないわけ？　ヨーコ
みたいに、綺麗に笑ってる写真とか」
大矢「そんなん撮ったってつまんねーだろ」
平島、遥子をチラッと見る。
笑っている遥子。
誉「別に面白くなくていいんですけど」
平島「まーでもさ、大矢の写真って笑えるの
になんか妙に雰囲気あるっつーか、マジで
写真の才能あるかもよ」
誉「ちょっと、変に褒めないでよ。こいつ調
子乗るから」
大矢「やっぱり、わかる人にはわかっちゃう
んですよねえ～」
ため息をつきながらも、自分の写真を
見て吹き出してしまう誉。

◯同・同・中（二十三年前・夕）
制服にコートを羽織った大矢、誉、遥
子、平島が机を囲んで座っている。
誉「で、ひらっちの見せたいものって何？」
大矢「俺バイトだからそろそろ出ないと」
平島「……まあ待て。お前ら、驚くだろうけ
ど大声出すなよ」
おもむろにバッグから雑誌を取り出し、
机の上に置く平島。
大矢「あ、今月号買ったの？　後で貸して」
無視して雑誌を開く平島。
夏祭りの誉と遥子の写真が見開きで掲
載され、『大賞：大井大矢』と書かれ
ている。
平島「すまん、勝手に応募した」
誉「えっ、何これ」
平島「お前の写真、受賞しちゃった」
ぽかーんと雑誌を見つめる大矢。
誉「え、うそ、すごい！　おめでとう！！」
誉が大矢の肩をバシバシ叩く。
紙面を指差す遥子。

遥子「待って！？　賞金三十万！？」
平島「よいしょー！　やーきにく、やーきにく！！」
　誰よりも大声で騒ぎ手拍子する平島。
大矢「えっ、えっ？？」
遥子「やばすぎ！　誉、モデル代！　モデル代もらわないと！」
誉「……いや、いらない。焼き肉も」
平島「ええーっ」
誉「大矢、この三十万でいいカメラ買いなよ」
　誉を見る大矢、遥子、平島。

○宝田家・誉の部屋・中（二十三年前）
　勉強机に向かって本を読んでいる誉。
　ＰＨＳが着信し、画面に「ちょっと出てきて」とメッセージ。
　誉が窓を開けると、自転車にまたがった大矢が右手をあげる。
大矢「買ってきた」
　首から下げたカメラを誉に見せる大矢。

○公園・中（二十三年前）
　古びた遊具しかない閑散とした公園。
　誉と大矢がベンチに座り、カメラをいじりながら説明書を読んでいる。
大矢「そこ立ってみて」
　ブランコの前に立つ誉。
　ファインダーを覗き、ピントを合わせる大矢。
誉「普通の顔でいいの？」
大矢「ダメだけど、今日だけ特別な」
　ふっと笑う誉。
誉「なにそれ」
　シャッターをきる大矢。

○路上（二十三年前・夕）
　干からびた田んぼが広がっている。
　自転車を押しながら歩く大矢と誉。
誉「さっきの、ちゃんと撮れてるといいな」
大矢「……また試し撮りする時、お前誘うわ」

誉「うん」
大矢が立ち止まり、鞄から缶の箱を取り出して誉に渡す。
大矢「これやる」
誉「何」
大矢「今までの、……モデル料」
誉の顔を見ずに自転車にまたがる大矢。
大矢「じゃーな」
誉「あ、うん」
自転車を漕ぐ大矢の後ろ姿を見送り、缶の蓋を開ける誉。
中には大量の写真の束が入っている。
写真を一枚一枚めくり、微笑む誉。
友人に囲まれて笑っていたり、何気ない瞬間の横顔など、めくってもめくっても、笑顔の誉の写真が出てくる。

○高校・体育館・中（二十三年前）
男子と女子に分かれバスケをしている生徒達。
壁際でジャージ姿の誉と遥子が体育座りしている。
誉「ね、ヨーコ今日バイト？　帰りうち寄らない？」
遥子「ごめん、今日用事ある」
誉「そっかあ。じゃあ明日、」
遥子「大矢に写真撮ってもらうの」
誉「え？」
遥子「……モデルになってって、頼まれちゃって」
誉「……そうなんだ！　そっか」
目を合わせない遥子。
遥子「次、私だ。……行ってくる」
立ち上がりコートへ走っていく遥子。
その後ろ姿を戸惑ったように見つめている誉。

○同・教室・中（二十三年前・朝）
生徒達が集まり「マジで！？」「いやいや、ないっしょ」などと騒いでいる。

教室に入ってくる誉。

誉「おはよー」

生徒達が一斉に振り返る。

誉「どしたの、みんな」

男子A「な、昨日、大矢とヨーコがデートしてたってほんと！？」

女子A「隣のクラスの子が見たって」

誉「ああ……デートっていうか、写真撮るって言ってたけど」

男子B「ほら、やっぱちげーじゃん」

男子A「なんだ、もしかしていい感じなのかと思ったー」

女子B「そんなわけないじゃん。大矢はやっぱ誉っしょ」

女子A「だよね」

男子A「えっ？　何、大矢と誉って付き合ってんの！？」

誉「んなわけないでしょ」

自分の席につき、鞄から教科書などを取り出す誉。

男子B「（男子Aを小突き）バカお前、まだ付き合ってねーよ」

男子A「え、あ、そーゆー感じ！？　大矢って誉のこと好きなの？」

男子B「違うっしょ、誉が大矢のこと……」

「バン！」と両手で机を叩いて立ち上がる誉。

誉「好きじゃないってば！　大矢と付き合うなんて一生ありえないから！」

静まり返る教室。

女子B「（ドアの方を見て）あ……」

大矢が入り口に立っている。

誉N「こうして私は、自分で自分に呪いをかけた」

クラス中の視線が集中する中、無言で誉の隣の席につく大矢。

頬杖をつき、顔を隠すように窓の外を見る誉。

そっぽを向く隣同士の二人。

誉N「人生で戻りたい時TOP3、堂々の第

一位。あの時、大矢が好きって言えてたら」
タイトル『運命だった人』
※回想終わり

○誉の家・部屋・中（夜）
ソファに座り本を読んでいる誉。
スマホの着信音が鳴り、画面を見ると
大矢から『外見て』とＬＩＮＥ。
スマホの時刻表示、『2:35』。
誉が窓を開けると、自転車にまたがった大矢が路上から見上げている。
そのまま大矢に電話をかける誉。
誉「今何時だと思ってんの」
大矢「電気ついてたから。これ」
電話しながらビニール袋を掲げる大矢。
大矢「撮影で余ったやつ、もらってきた」
誉「何それ」
大矢「花火」

○同・屋上・中（夜）
高層ビル群や東京タワーなどの夜景が遠くに見える。
床に座りこみ、花火を物色しながら缶ビールを飲んでいる誉と大矢。
足元に空き缶が並べられている。
誉「なんか本格的なやつばっかだね」
大矢「浅草橋の問屋で仕入れたんだって」
誉「へー」
花火のパッケージを一つ手に取り、見つめる誉。
誉「……こういうのはさ、彼女とやんなよ」
大矢「あいつこういうの興味ないから」
誉「やだからね私、勘違いされるの」
誉の肩をポンと叩く大矢。
大矢「お前だけは絶対ないから大丈夫」
誉「心の底からこっちのセリフなんですけど。てか早くみんなに言いなよ、彼女できたって」
大矢「いいよ、いちいち」
誉「私が迷惑被ってんの」

大矢「どうせあいつら、俺らに相手がいようが一生言うじゃん。結婚でもしない限り」
誉「すればいいじゃん。彼女と」
大矢「……お前は？　最近どーなの」
誉「なんも。てか聞いた？　まるこの結婚パーティー、ヨーコも来るって」
大矢「聞いた聞いた。五年ぶり？」
誉「ニューヨーク行ってから、一回も会ってないもんね」
大矢「ヨーコ、もうお前の顔忘れてんじゃねーの」
誉「んなわけないでしょ」
笑う大矢。
誉「しかもまるこのヘアメイク、ヨーコがやるらしいよ」
大矢「ちなみに俺は、写真頼まれてるけど」
誉「え、そうなの！？　超豪華じゃん！」
大矢「楽しみだよなー」
誉「楽しみ！　もうすぐひらっちんとこも三人目生まれるし、おめでた続きだね」
大矢「だなー」
立ち上がり、手すりにもたれて景色を眺める大矢と誉。
空が明るくなりかけている。
大矢「もー朝じゃん」
誉「花火、また今度にする？」
ポケットからデジカメを取り出し、朝焼けに染まる街の景色にカメラを向ける大矢。
大矢「……なんかさぁ」
誉「んー？」
大矢「なんで俺ら、いつまで経っても結婚できねーんだろうな」
誉「……いい歳して、こんな時間に飲んだりしてるからでしょ。ほら、早く帰んなよ」
手すりから離れようとする誉の手を大矢が掴む。
大矢「あのさ」
見つめ合う大矢と誉。
誉「何」

大矢が手を離す。
大矢「……なんでもない」
誉「なんだそりゃ」
しゃがみ込み、花火を一つ手に取って封を開ける誉。
誉「やっぱやろっか、花火」
大矢「今度でいいよ」
誉「やろうよ。それでさあ」
花火に火をつける誉。
誉「もう、うちには来ないようにしなよ」
火花が飛ぶ。
朝焼けの中、花火を両手に持ち、くるくる回って見せる誉。
誉「はは、めっちゃ朝」
大矢「……だな」
花火を持ってはしゃぐ誉の後ろ姿にカメラを向け、シャッターを切る大矢。

◯コンビニ・店内（夜）
品出ししている誉と神崎。
誉がため息をつく。
神崎「せんせー、なんかありました？」
誉「別に。なんもない」
神崎「じゃあそんな顔しないでくださいよ」
通せんぼするように誉の前に立つ神崎。
神崎「辛い時は、俺の腹、殴っていいから」
誉「私のこと何だと思ってんの？」
無視して作業を続ける誉。
神崎「いいから！　騙されたと思って一発殴って！　お願いお願い！」
誉「やだ、なんかこわい！」
神崎「いいから！　カモン！！」
観念したようにため息をつき、神崎の腹にグーパンチする誉。
誉「かたっ！？　何これ」
神崎「じゃーん」
腹に仕込んでいた少年誌を、制服を捲って取り出して見せる神崎。
誉「……商品で遊ぶんじゃないよ」
神崎「安心してください、私物っす」

呆れ顔で品出しに戻る誉。
少年誌を腹に戻す神崎。
神崎「また強盗来たら、次こそせんせー守るって決めてるんで。これで刺されてもヨユーっす」
吹き出す誉。
誉「ばか。そんな何回も強盗に遭ってたまるかっつーの」
誉の顔を覗き込み、嬉しそうな神崎。
神崎「笑った」
誉、慌てて目を逸らす。
入店チャイムが鳴り、誉をかばうように前に進み出る神崎。
神崎「（低い声で）らっしゃーせ」
誉「……え、なんでいるの！？」
入口に、サングラスから目をのぞかせた遥子（41）が立っている。
片手をあげる遥子。
遥子「やほ」
誉「ヨーコ！　会いたかった！」
神崎を押し退け、遥子に抱きつく誉。
遥子「誉が刺されたっていうから、心配で早めに帰ってきちゃったよ」
誉「もう全然平気！」
遥子「みたいね、安心した」
気にしてほしそうに誉と遥子の周囲をウロウロする神崎。
遥子「あ、すいません、お仕事中に」
神崎「いえいえとんでもない！　ここ世界一暇なコンビニなんで！」
誉「おい」
神崎「あの、もしかして……ヨーコさんっすか！？」
遥子「……？　はい」
神崎「（拍手して）わー！　本物だ！！」
誉「気にしないで。ただの寅年生まれのバンドマンだから」
遥子「ああ。今度は何？　寅次郎？」
神崎「琥太郎っす！」
顔を見合わせる誉と遥子。

○路上（朝）

並んで歩く誉と遥子。

誉「ヨーコが今一番食べたいもの、当てよっか」

遥子「寿司」

誉「ちょっと！　先に言わないでよ！」

遥子「あはは」

誉「どーする、このまま築地でも行っちゃう？」

すしざんまいのポーズをして見せる誉。

遥子「朝から元気だねえ」

誉「てかヨーコ、いつまでいれるの？」

遥子「今月いっぱい。とりあえず、まるこの結婚パーティーのあとは実家に泊まろうかなって」

誉「あ、私もそのつもり！　そしたら地元でもみんなと遊べるね」

遥子「うん」

誉「あれ、もしかして築地より豊洲の方がお店多いのかな？　移転してから一回も行ったことないからよくわかんないなー……」

スマホを取り出し、調べながら歩く誉と、少し遅れて歩く遥子。

遥子「あのさ」

誉「ん？」

遥子「刺された時さ」

誉「うん」

遥子「どんな感じだった？」

誉「んー、あ、走馬灯みたよ」

遥子「マジ？」

誉「マジマジ、九死に一生スペシャルって感じ。全然死ななかったけど、はは」

遥子「……死んじゃうかと思った」

立ち止まる遥子。

誉、気づかずに歩き続ける。

誉「あはは。びっくりだよねえ。あれ、ヨーコ？」

振り返る誉。

遥子「誉が死んじゃって、このまま本当のことと言えなかったら一生後悔すると思った」

サングラスを外す遥子。
遥子「私ね、……誉のことが好きだったの。嫉妬してたの、大矢に」
誉「え？」
遥子「だから、嘘ついた、高校ん時。大矢にモデル頼まれたって、誉に嘘ついた。本当は私が、撮ってって頼んだだけなのに」
戸惑ったように遥子を見つめる誉。
遥子「ちょっと邪魔してやろうと思っただけなんだけどな。まさか、あんな事になるなんて……」
遥子がバッグの持ち手をぎゅっと握りしめる。
遥子「誉と大矢が付き合わなかったのは、私のせい」
誉「……何言ってんの、違うよ」
遥子「違わない！　ずっと見てたんだよ、一番近くで」
誉「……」
遥子「私逃げたの、ニューヨークに。卒業して、大人になっても、ずっと友達のままでいる誉と大矢を見てるのが辛かった」
背を向け、遥子がサングラスをかける。
遥子「ごめん、怒ってるよね」
誉「……怒ってるよ」
うつむく遥子。
誉「怒ってるよ。情けないよ」
遥子「ごめん……」
誉「私は何でもヨーコに話して甘えてきたのに、自分ばっか話してヨーコの気持ち聞けなかった自分に怒ってるよ！」
遥子を抱きしめる誉。
誉「会いたかった」
遥子「うん」
誉「会いたかったよ」
サングラスをずらし、涙を拭う遥子。
誉「五年も帰ってこないから、もう私の事なんて忘れちゃったのかと思ってた」
遥子「逆。忘れに行ってた。ついでに向こうで彼女もできた」

誉「何それ、聞いてない！」
泣き笑いの誉と遥子。
誉「何だよ、心配させんなよ」
遥子「あんたもね」
誉「……死ななくてよかった」
遥子「うん」
誉「ヨーコの話、ちゃんと聞けてよかった、生きててよかった」
遥子「うん……ごめんね誉。ごめんね」
誉「ううん。……話してくれてありがとう」
遥子がバッグから青い封筒を取り出し、誉に渡す。
誉「……？」
遥子「ラブレター」
誉が封筒を開ける。
十六歳の誉がブランコの前に立ち、笑っている写真が出てくる。

○（回想）高校・廊下・中（二十三年前・朝）
遥子が歩いてくる。
教室に入らず入口の前に立っている大矢に気付き、声をかけようとして立ち止まる遥子。
男子Ａの声「大矢って誉のこと好きなの？」
男子Ｂの声「違うっしょ、誉が大矢のこと……」
机をバン！　と叩く音。
誉の声「好きじゃないってば！　大矢と付き合うなんて一生ありえないから！」
静寂。
大矢、入口のゴミ箱に青い封筒を捨て、無言で席につく。
誰にも気付かれないように、封筒を拾い上げる遥子。

○居酒屋・中（夜）
四人掛けのテーブルで向かい合って飲んでいる誉と神崎。
神崎「せんせーが絡み酒するからヨーコさん帰っちゃったじゃないすか」

誉「ヨーコは元々用事あったの。てかなんで神崎君とサシで飲まなきゃなんないわけ」
神崎「ひどい、俺が先にこの店で飲んでたのに！　たまたま来ちゃったのはそっちじゃないっすか」
誉「あーあ。虎の呪いだ」
神崎「運命っしょ」
誉「偶然です」
神崎「運命と偶然って何が違うんですかね」
誉「そりゃ、全然違うでしょ」
神崎「一緒でしょ。てか、せんせーっていつも……」
誉「何よ」
神崎「なんでもないっす」
誉「なんでもなくないでしょうが。いつも何」
神崎「いいから。飲みましょ」
誉「……わかった」
店員を呼び止める誉。
誉「すいませーん、（メニューを指さし）これください」
店員が注文を打ち込んで去る。
神崎「何頼んだんすか？」
誉「テキーラ相撲セット」
神崎「え？　テキーラ？　なんて？？」
店員がテキーラの瓶とショットグラス十個をトレイに乗せて運んでくる。
グラスに次々とテキーラを注ぎだす店員。
神崎「あの、テーブル間違えてません？」
誉がグラスを二つ手に取り、一つを神崎に渡す。
誉「せーので一杯飲むごとに、あんたが私の言うことを聞く。いいね？」
神崎「俺のメリットは！？」
誉「せーの」
誉がショットを飲み干し、慌てて神崎も続く。
誉「さっき言いかけたこと言え」
神崎「……生年月日が同じなのも、寅年生まれで名前に虎が入ってるバンドマン？　に

縁があるのも、ただの偶然っすよ」
睨みあう誉と神崎。
誉「答えになってない。やり直し。せーの」
二杯目のショットを飲み干す誉と神崎。
酒の味に顔をしかめたり、オエっと舌を出したりする誉と神崎。
誉「……さっきの質問に答えろ」
神崎「先生っていつも、そうやってこじつけて、うまくいかなかったらネタにしますよね。偶然を運命にしたり、運命を呪いにしたりとかして」
誉「……」
神崎が会計表を掴んで立ち上がる。
神崎「さっ、もう帰りましょー」
誉、グラスを一つ取って飲み干す。
誉「……もう四十歳なのに、お金がない」
神崎「お金がないなら相撲セット頼まないでよ」
誉「本なんかもう何年も書けないし、好きな男には彼女がいる。料理もできないし、NHKの受信料も払ってない。もう四十歳になったのに」
溜息をついて座り直す神崎。
誉「人生後悔だらけ。常に昔に戻りたい」
神崎「……最低でも八十歳まで生きるとして」
グラスを一つ取り飲み干す神崎。
神崎「くーっ。今四十歳なら、こっからもう一回できますよ、人生！」
誉「……」
誉がグラスを二つ取り、神崎に一つ差し出す。
ニヤッと笑う神崎。
誉・神崎「乾杯！」
○マンション・外観（夜）
自転車にまたがった大矢が誉の部屋を見上げるが、電気は消えている。
リュックから写真を取り出して眺める大矢。
朝焼けの屋上で花火をする誉の写真。

○路上（夜）
誉をおんぶした神崎が歩いてくる。
神崎「せんせー飲み過ぎっす、マジで～」
誉「（寝ぼけて）ごめん、大矢……」
神崎「……。俺の父ちゃんと母ちゃん、引くくらい仲いいけど、生年月日、違うんすよ」
神崎の背中で寝息を立てている誉。
神崎「せんせ！　家あそこで合ってます？」
誉「あ……ごめん、寝てた」
神崎「大丈夫っすか？　歩けます？」
誉を下ろす神崎。
誉、神崎に支えられるようにして歩き出すが、よろめいて神崎が抱き止める。
そのまま誉を抱きしめる神崎。

○マンション・外観（夜）
神崎に抱きしめられる誉を、遠くから見つめている大矢。
写真をリュックに突っ込み、誉たちと反対方向へ自転車で走り去る。

○北関東郊外の駅・外観
ロータリーに軽自動車が停まっている。
駅の階段からボストンバッグを抱えた誉が降りてくると、軽自動車の窓が開き、運転席の豊が顔を出して手を振る。
豊「おねーちゃん！　おかえりー！」
誉「声でっか」
笑って手を振り返す誉。

○走行中の軽自動車・中
運転する豊と助手席の誉。
豊「結婚パーティー、六時からだっけ？」
誉「そう」
豊「お父さん悔しがってたよ、せっかくお姉ちゃん帰ってくるのに、なんで今日に限って温泉旅行なんだって」
誉「いいじゃん温泉。お母さんこないだ電話したけど、かなり浮かれてたよ」
豊「でしょ！　一番お気に入りのワンピース

着て出かけてったもん」
窓の外を眺めている誉。
誉「……なんか変わったねー、この辺」
豊「お店増えたっしょ。スタバなんてもう市内に五軒あるから」
誉「五軒も？　人口足りてる？　逆に」
豊「またそうやって地元をバカにして～」
誉「してないしてない」
豊「これだから東京に出てった奴らは」
誉「バカにしてないってば。ってかむしろ」
豊「むしろ？」
誉「……戻ろっかなあ、地元に」
豊「えっ」
驚いて誉を見る豊。
誉「ほら、結婚も仕事もできないままフラフラしてるなら帰ってきなさいって、ずっと言われてたしさあ」
豊「……やめなよ。無理だよ、お姉ちゃんみたいな人は」
誉「なんでよ」
豊「どうせなんかあったんでしょ」
誉「……そんなんじゃないけど」
豊「地元に住むとかありえないって、散々言ってたのに」
誉「……」
豊「うまくいかないからって帰りたいとか、都合よすぎ」
黙り込む誉と豊。

○パーティー会場・ホール・中（夜）
立席式の結婚パーティー。着飾った招待客で賑わっている。
部屋に入ってきた誉が、カメラを首から下げた大矢を見つけて手を挙げる。
誉「久しぶり」
大矢「……ああ」
誉「意外と知らない人いっぱいいるね」
目を合わせない大矢。
大矢「そう」
大矢のよそよそしい様子に気付き、ぎ

こちなく笑う誉。
誉「受付でひらっちに会ったけどさ、なんかまたおっきくなってなかった？」
大矢「……さあ」
誉「……あー、何時頃から来てたの？　撮影、大変だね」
大矢「別に」
沈黙する誉と大矢。

○同・バーカウンター・前（夜）
ドリンクを注文する列に並ぶ遥子と平島（41）。
平島「やっぱ幼稚園でそういう言葉も覚えてきちゃうからさ」
遥子「なるほどね」
平島「こないだついに『ブス』とか言い出したわけ。俺、さすがに怒ったよ」
遥子「『大矢みたいになっちゃうよ』って？」
平島「あいつ昔、マジでひどかったもんなー」
遥子「今だったら完全にアウトだよね」
平島「昔からアウトだろ」
遥子「うんごめん、アウトだわ」
メニューを眺める平島と遥子。
平島「俺ノンアルかなー、明日早いし」
遥子「偉い！　大人になったねえ」
平島「なんだかんだ俺が一番大人よ、昔から」
遥子「そうかもね。……色々ありがとね」
平島「え、何、いきなり」
遥子「誉に話せたよ」
驚いたように遥子を見つめる平島。
平島「……全部？」
遥子「全部」
平島「……そっか」
遥子「うん」
ドリンクの注文の順番が回ってくる。
平島「ノンアル……いや、シャンパンください！　4つで！！」
吹き出す遥子。

○同・ホール・中（夜）

気まずい雰囲気の誉と大矢。
遥子と平島がシャンパンを持ってくる。
平島「おい、飲もーぜ！」
遥子「てかひらっちさあ（まじまじと見つめ）
なんか、また大きくなったよね」
シャンパンを誉と大矢に渡す平島。
平島「やっぱり？　最近俺、子供達にベイマックスって呼ばれてんだよね」
誉「……」
大矢「……俺、そろそろ行くわ」
グラスを平島に押し返し、立ち去る大矢。
遥子と平島が顔を見合わせる。
司会の声「それでは皆様、会場入口にご注目ください。新郎新婦の入場です！」
招待客達が一斉に入口の方を向く。
音楽がかかり、扉が開いて新郎新婦が入場してくる。
「おめでとう！」などの歓声が上がる。
笑顔で拍手する招待客たち。
拍手しながら、写真を撮る大矢を目で追う誉。

○同・同・前（夜）
吹き抜けの二階の扉の前で談笑している誉、遥子、平島、大矢と数人の男女。
すぐ横に一階への長い階段。
平島「いやー、結婚式っていいよな～」
遥子「ひらっちまじ泣きすぎ」
男A「次は誉と大矢の結婚式だな！」
男B「え、逆にまだやってなかったっけ」
誉「（苦笑い）いやいや、ないから」
女「みんな楽しみにしてるんだからね」
男A「そうだぞ、俺に早くスピーチ読ませろ」
女B「もう来年の二人の誕生日で式場押さえちゃおうよ」
男B「いいね！」
女A「あーなんか、想像だけで泣けてきた、二人の晴れ姿」
何人かがすすり泣くフリをして、笑い

が起きる。
居心地の悪そうな誉を心配そうにチラッと見る遥子と平島。
遥子「……ほらみんな、馬鹿なこと言ってないで早く二次会行こ」
女B「いいじゃん、今二人ともフリーなんでしょ？」
男A「そーだよ、誉と大矢がくっつけばみんなハッピーじゃん」
誉「だからー。ね、大矢。あんた彼女……」
カメラをいじっていた大矢が、顔を上げて誉に笑いかける。
大矢「じゃあ、結婚しちゃう？」
赤面し、動揺する誉。
どよめく一同。
大矢が誉の前に歩み出る。
誉「ちょっと、何言って……」
大矢「結婚しよ」
強引に誉にキスする大矢。
静まり返る一同。
大矢が周囲を一瞥する。
大矢「……これで満足かよ」
大矢を突き飛ばし、後ろへよろける誉。
涙がこぼれる。
平島「危ない！」
誉、階段を踏み外して体が宙に浮く。
落下していく誉。
誉M「時よ、戻れ」

○（誉のイメージ）公園・中（二十三年前）
古びた遊具しかない閑散とした公園。
17歳の誉と大矢がベンチに座り、カメラをいじりながら説明書を読んでいる。
大矢「そこ立ってみて」
ブランコの前に立つ誉。
ファインダーを覗き、ピントを合わせる大矢。
誉「普通の顔でいいの？」
大矢「ダメだけど、今日だけ特別な」

誉「なにそれ」
大矢が驚いた顔でカメラから顔を上げる。
誉、涙を拭いながら。
誉「あはは、なんでここなんだろう」
大矢「……お前、なんで泣いてんの？」
誉「なんでだろうね、へへ」
両手で顔を覆う誉。
ハンカチを差し出そうと慌ててポケットを探り、くしゃくしゃのハンカチをつまみ上げる大矢。匂いを嗅ぐ。
大矢「クセっ」
誉、泣きながら笑っている。
大矢「笑いすぎだよ」
ブランコの柵に座る誉。
誉「はー。疲れちゃった」
大矢「これでも喰らえっ」
ハンカチを無理やり誉の顔に押し付ける大矢。
誉「ください」
誉、そのままハンカチで顔を隠して動かない。
大矢「なあ」
誉の顔を覗き込む大矢。
誉「大丈夫大丈夫」
大矢「じゃあ、大丈夫じゃねーなお前は」
誉「……疲れちゃったよ」
大矢「笑いすぎなんだよ、ばか」
誉「大矢がいない事に疲れた」
大矢「何だよ、それ」
誉「たとえば、面白い映画観た時とか、美味しいもの食べた時とか、」
大矢が誉の隣に腰を下ろす。
誉「芸能人とすれ違ったとか、おみくじで大吉引いたとか、酔っぱらった時とか」
ハンカチで目を抑える誉。
誉「虹を見たとか、雪とか、花とか、犬とか」
大矢「うん」
誉「歩いてる時も、寝てる時も、朝起きた時も、」

誉がハンカチを顔から外す。
泣きながら大矢に笑いかける誉。
誉「いつも隣にいてよ」

◯病院・個室・中（夜）
ベッドに寝ている誉。
涙が頬を流れて、目を開ける。
椅子に座り誉の手を握っていた豊が泣きながら誉に抱き着く。
豊「お姉ちゃん！　良かった、本当に良かった」
手で涙を拭い、そのまま両腕で目を覆う誉。
誉「やだなー。……めっちゃ好きじゃん」
それぞれ号泣する誉と豊。

◯同・待合室・中（夜）
人けのない待合室。
大矢、平島、遥子の三人がばらばらに座っている。
平島「……帰れよ」
平島が立ち上がり、大矢を見下ろす。
うつむいている大矢。
平島「てめえに言ってんだよ！　なあ！」
平島が大矢の襟元を掴み、引っ張り上げられるようにして大矢が立ち上がる。
遥子「ちょっと！　やめなよ！」
平島「お前何年たっても何もわかってねーんだよ！　自分が傷つきたくないからって人に迷惑かけんなよ。誉に甘えんなよ！」
俯いたまま目を合わせない大矢。
平島が大矢を突き放す。
平島「……お前さ、みんなが簡単にスムーズに幸せになってるとでも思ってんの？」
遥子「……」
大矢「……」
大矢に背を向ける平島。
平島「帰れよ。マジで」
大矢「……そうだよな」
平島「……」

大矢「どのツラ下げてここに来てんだよな、俺」
遥子「大矢」
大矢「ごめん」
大矢が出ていく。
沈黙する平島と遥子。
泣き顔の豊が入ってくる。
豊「お姉ちゃん、目、覚ましました」
平島が立ち上がり、豊の後に続いて病室へ向かおうとする。
遥子「……ごめん」
豊と平島が振り返る。
遥子「私、行けない」
病室と反対方向へ走って出ていく遥子。

○同・個室・中（夜）
豊がドアを開け、平島が入ってくる。
ベッドから平島に笑いかける誉。
足にはギプス。
誉「ごめんね、心配かけて」
平島「大丈夫？」
誉「大丈夫大丈夫、気失ってただけ」
平島「でも、足……」
誉「大丈夫、折れてるけど手術はないから」
豊「明日には退院できるって」
誉「そ。毎日牛乳飲んでて良かった～」
平島「マジか……」
力が抜けたようにへたり込む平島。
豊が笑って椅子を勧める。
誉「ねえ、変な事聞くけどさ」
豊「ん？」
平島「何」
誉「もしも、もしもだよ？　タイムリープして人生やり直せるとしたら」
顔を見合わせる平島と豊。
誉「どこに戻りたい？」
平島「ええー？」
豊「何、いきなり～」
笑いながらも考え込む平島と豊。
平島が手を挙げる。

平島「はいはい！　俺、アサヤンのオーディション、応募すればよかった、中学生ん時」
誉「あはは、ケミストリーの半分がひらっちだった世界線、やばい」
豊「うける！　てか文化祭で歌ってたよね」
　咳払いして歌い出そうとする平島。
誉「（無視して）豊は？」
豊「うーん。……まあ、今も悪くないよ」
誉「そっか」
豊「ていうか、お姉が生きてる今がいい」
誉「……（じーんとして）そっか」
平島「豊ちゃん、いいこと言うじゃん」
豊「当たり前」
　笑いあう誉、豊、平島。
誉「まるこ達に謝らなきゃなー。お祝いの席なのに、めちゃくちゃにしちゃった」
平島「誉は悪くないじゃん」
誉「うん。全部大矢が悪い」
平島「……てゆーか、これまでネタにしてた俺らクラスメイト全員悪い。ごめん、誉」
　頭を下げる平島。
誉「いいよ。……半分は、本気で言ってくれてたでしょ、みんな。そうなったらいいなって」
豊「何、なんかあったの？　てかそういやどこ行ったの？　大矢君たち」
誉「え、いたの？」
平島「……あー、さっきまで、大矢とヨーコちゃんもいたんだけど、その……」
　ドアが勢いよく開き、遥子が駆け込んでくる。
遥子「誉！！」
誉「（嬉しそうに）ヨーコ！」
遥子「（涙目）……生きてる」
誉「うん」
　遥子、そのまま病室を飛び出す。
　何事かと顔を見合わせる誉、豊、平島。
　少し間を置いて、大矢が遥子に引っ張られて入ってくる。
大矢「誉、その……」

笑顔を作る誉。

誉「……全然大丈夫！　いや～連続で二回も入院してさ、二回とも命に別状ないって私、さすがに強運すぎない？　これもう絶対ネタにして本書いてやる」

大矢「そうじゃなくて」

誉「大丈夫じゃないよ」

大矢「……」

誉「大丈夫なわけないじゃん」

大矢「……ごめん」

誉「……」

大矢「本当にごめん。最低だ、俺。でも」

泣き出す大矢。

大矢「無事でよかった」

誉が大きく溜息をつく。

誉「（ボソッと）なんで私、こんな奴が好きなんだろ」

大矢が驚いたように顔を上げる。

誉「うまくいかないことがあるとさ、いつも考えちゃうんだよね。あの時こうすればよかったなーとか、あの時に戻ってやり直せたらいいのになーって。そうやってさ、『うまくいってたはずの自分』と、今の自分を比べてんの、常に」

大矢「……」

誉「でももう、そういうのやめたいんだ」

大矢を見つめる誉。

誉「好き」

大矢が見つめ返す。

口元を手で押さえる豊、遥子、平島。

大矢「俺は……」

言葉に詰まり、うつむく大矢。

誉「大丈夫」

大矢「……ごめん」

誉「わかってるから、大丈夫。それに今から私の可愛い可愛い妹と、二人の大親友が私を慰めてくれるから、本当に大丈夫。ね！」

豊、遥子、平島に笑いかける誉。

三人の顔を見て泣きそうになり、慌てて窓の方へ顔を背ける。

誉「彼女、大切にしなよね！」

黙り込む大矢。

豊が立ち上がり、静かにドアを開ける。

遥子が大矢の背中をぐいぐい押して、部屋から追い出す。

大矢「えっ」

平島がドアを閉め、鍵をかける。

顔を見合わせて、笑い出す一同。

豊、遥子、平島が誉を抱きしめる。

三人の腕の中で泣いている誉。

◯誉の家・部屋・中

本棚の組み立てをしている誉と豊。

かなり散らかっている。

豊「わざわざ東京まで手伝いに来たんだからさあ、明日推しの聖地巡礼付き合ってくれるよね？」

誉「あーごめん。片付いたらすぐ取りかかんなきゃだから無理だわ。締め切り近いし」

豊「えーっ。ただ働きぃ」

誉「賞金入ったらいくらでも付き合うからさ。私のおごりで」

豊「当たり前だよ！　こんなこき使ってんだからさー」

誉「絶対大賞獲ります！　てか文句言いつつ来てくれるのが、あんたの良いところだよねえ」

豊「まー、お姉が地元戻りたいとか言い出した時はいよいよかと思ったけどさ。もう一回頑張るってんなら、手伝ってやらんこともないかなって」

誉「なんてできた妹なの！　じゃついでにさ、お風呂の掃除も手伝ってくれる？」

豊「調子乗んな！　ほら、できたよ」

本棚が完成し、壁際に設置する誉と豊。

床やデスクの上に山積みになっていた本を収納していく。

デスクの上の本を運ぼうとして、間に挟まっていた青い封筒に気付く誉。

封筒を手に取り、中の写真を取り出し

て眺め、懐かしそうに微笑む。
豊「もー、お姉ちゃん、サボってないでさっさと片付けてよ」
誉「はーい」
豊「それ、何て書いてあるの？　裏」
誉「え？　裏？」
写真を裏返す誉。
写真の裏、サインペンで『好きだ』と書かれている。
ハッとする誉。
誉「豊」
豊「ん？」
誉「ちょっと出てくる」
豊「何、急に。どこに」
誉「ごめん、すぐ戻る」
誉の真剣な表情に気圧される豊。
豊「わかった」
誉が部屋を飛び出していく。
作業途中で抱えていた雑誌や写真集を本棚に収納して、背表紙を眺める豊。
そのほとんどに『大山大矢』の文字。
豊「……うわ、大ファンじゃん」
窓に駆け寄り、外に顔を出す豊。
路上に誉を見つける。
豊「お姉ちゃん、帰りにアイス買ってきてー」
誉が振り向く。
豊「がんばれー！」
小さく頷き、駆け出す誉。
笑って手を振る豊。

○路上
全速力で走る誉。
右手に青い封筒。

○大矢の家・玄関・前
小さな一軒家。
大矢の自転車が停められている。
虹子と誉が、無言で向かい合っている。
ドアを背に腕組みしている虹子。
慌てている様子の誉。

虹子「で？　どういったご用件で」
誉「あ、あの」
虹子「ああ」
　意地悪そうに笑う虹子。
虹子「宗教の勧誘か」
誉「いや、えっとその……」
虹子「大丈夫です、うち、幸せなんで」
誉「いや、私、」
虹子「結婚決まったんで。カメラマンの彼と」
誉「えっ」
虹子「この世の誰よりも幸せなんで、あたし。宗教とかいらないです」
誉「そう、ですか……えと……お幸せに」
　誉の鼻先を掠めるようにドアが閉まる。

○同・リビング・中
　掃除機をかけている大矢。
　玄関から虹子が戻ってくる。
大矢「誰？」
虹子「宗教の勧誘。断っといた」
大矢「てか、忘れ物取りに来ただけなのに、勝手に出んなよ」
虹子「何その急な他人ヅラ」
大矢「……ごめん」
虹子「謝んないでよ！　フッたのあたしだからね」
大矢「……荷物、もう忘れんなよ」
虹子「はいはい」
　虹子がバッグを肩にかけ、出ていこうとして振り返る。
虹子「最後に思いっきりビンタしていい？」
大矢「……いいよ」
　掃除機を置き、素直に目を瞑って頬を差し出す大矢。
　虹子、しばらくその顔を見つめて。
虹子「やっぱやーめた」
大矢「（目を開け）なんで」
虹子「もう仕返し済みだから」
大矢「え、何？　いつ？」
虹子「教えなーい」

振り返らず部屋から出ていく虹子。

虹子「じゃあねー、お幸せに」

○コンビニ・外観（夜）

制服姿で雑誌を立ち読みしている誉の姿が見える。

○同・店内（夜）

雑誌の検品をする誉。

誉N「どうやら、タイムリープはそう簡単にできないらしい」

少年誌を手に取り、表紙を眺める。

表紙、漫画のタイトルの横に『TVアニメ放送開始！　タイムリープで人生何度でもやり直せ！』のコピー。

立ち読みを始める誉。

誉N「だけど、時間なんか戻さなくたって、いつでもやり直すことはできる」

神崎がモップ片手に少年誌を覗き込む。

神崎「せんせー好きっすねー、タイムリープ」

少年誌を棚に戻して検品を再開する誉。

誉「その呼び方、やめてってば」

神崎「てかなんで刺された時、タイムリープなんかできると思ったんすか」

誉「なんだっけ」

× × ×

（フラッシュ）

神崎が誉に向かって何かを繰り返し叫んでいる。

神崎『と・ま・れ』（っぽい口。聞こえない）」

× × ×

誉「そうだ！神崎君さ、私が刺された時、何か叫んでたでしょ」

神崎「え？」

誉「私に向かって、『戻れ』とか、『止まれ』とかそんな感じの」

神崎「（少し考えて）ああ」

誉『戻れ』って、時を遡れ、って意味かと思って」

神崎「発想かっこよ」
誉「違うの？　なんて言ったの？」
神崎「名前を呼びました」
誉「え？」
神崎『ほまれ』って」
誉「は？　え、呼び捨て？」
神崎「先生って呼ぶの、やめろっていうから」
誉「言ったけど」
神崎「死んじゃうかと思って、こっちも必死だったんで」
誉「せめて『さん』をつけなさいよ」
神崎「名前で呼んでいい？」
まっすぐ誉を見る神崎。
神崎「好きっす俺、誉さんのこと」
手に持っていた雑誌を全部落とす誉。
入店チャイムが鳴る。
神崎「らっしゃーせー」
入口の方へ振り返る誉と神崎。
息を切らした大矢が立っている。
誉Ｎ「人生をやり直したいなら、いつだって今ここで、向き合うしかないのだ」

○誉の家・部屋・中
片付いた部屋。
デスクに突っ伏して、うたた寝している誉。
窓から風が入り、カーテンが揺れる。
デスクの上のノートパソコンの画面に誉の原稿が表示されている。
『（まだ結ばれない）運命の恋人　宝田誉』

（了）

【使用楽曲】
曲名：勇気１００％
アーティスト名：光ＧＥＮＪＩ
作詞：松井五郎
作曲：馬飼野康二